

[学術論文]

公開された台湾関係『留守名簿』調査  
—特設警備第 505 大隊及び第 508 大隊の例—

Investigation of ‘Absence name lists’ of unit 505 and 508

小野 純子

Junko ONO

---

*Studies in Humanities and Cultures*

---

No. 30

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 30号

2018年7月

**GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES**

NAGOYA CITY UNIVERSITY  
NAGOYA JAPAN

JULY 2018

〔学術論文〕

## 公開された台湾関係『留守名簿』調査

### —特設警備第505大隊及び第508大隊の例—

#### Investigation of ‘Absence name lists’ of unit 505 and 508

小野純子  
Junko ONO

はじめに

1. 『留守名簿』の公開と調査手順
  2. 『留守名簿 特設警備第505大隊・湾第13862部隊』の調査と分析
  3. 『留守名簿 特設警備第508大隊・湾第13872部隊（学徒）』の調査と分析
- おわりに

**要旨** 本研究の目的は、特定歴史公文書の一つである『留守名簿』の調査と分析を通して、戦争末期の台湾、第10方面軍における防衛体制の再検討を行い、その細部を明らかにすることである。本論は、その一助として特設警備第505大隊及び特設警備第508大隊の『留守名簿』調査を行い、調査の現状と成果を報告するものである。両大隊の『留守名簿』調査を行ったことで、既存研究との相違点と一部、部隊の新たな実態が明らかになった。

**キーワード**：植民地、台湾、学生、動員、留守名簿

はじめに

本研究の目的は、『留守名簿』の調査<sup>1</sup>と分析を通して、戦争末期の台湾、第10方面軍における台湾防衛体制を再検討することである。本論ではその一助として特設警備第505大隊（以下、第505大隊）及び特設警備第508大隊（以下、第508大隊）『留守名簿』の調査を行い、その調査の現状と成果を報告する。本論は、当該研究における『留守名簿』調査の重要性を指摘するものである。

台湾関係『留守名簿』は、2013年、厚生労働省より国立公文書館へと移管された<sup>2</sup>。『留守名簿』

<sup>1</sup> 本論の執筆に際し、分析のために『留守名簿』を電子化した留守名簿整理表を佐藤綾香さんに再チェックを行ってもらった。筆者が国立公文書館つくば分館で撮影した『留守名簿』の原本から電子化したものは間違いが多く大変な苦勞をかけた。また、台北高等学校の貴重な資料を国立台湾師範大学博士課程の徐聖凱さんより提供していただいた。徐さんには2017年度筆者が台湾で行った学会発表でも2回コメンテーターの役を引き受けていただいた。この場をかりて感謝の意を表したいと思う。ありがとうございました。

<sup>2</sup> 『留守名簿』の国立公文書館への移管は、2010年より「戦没者援護関係史料の国立公文書館への移管」事業により始まった。台湾関係は概ね2013年に移管されている。

とは、特定歴史公文書の一つであり、戦前に外征部隊所属者の現状と留守関係事項を明らかにするために作成された名簿史料である。『留守名簿』は戦後長らくその公開と閲覧が制限されていたが、戦後70年を機に後世に伝えるため、国立公文書館へと移管され、公開及び閲覧の申請が可能となった<sup>3</sup>。

戦争末期の台湾では、それまで台湾を管轄していた台湾軍が廃止となり、第10方面軍が新設され、その役割を担うこととなった。第10方面軍とは、陸軍の方面軍の一つであり、その隷下には、台湾島内各地の防衛を担っていた師団、旅団及び沖繩本島に司令部を置く第32軍があった。台湾軍司令官、第10方面軍司令官は陸軍大将であり、後に第19代台湾総督となる安藤利吉が任されていた。安藤利吉は、台湾における軍の長と行政の長、どちらの任務にも就いていた。

本論で扱うのは、戦争末期に作成された台湾関係の『留守名簿』である。台湾における戦争末期の台湾防衛体制、軍事動員に関する研究は、陸軍一般史料等で概要は明らかにされてきたものの、陸軍一般史料以外の公式史料は終戦時に焼却処分されるなど今なお不足しているのが現状である。また、戦後、中華民国軍によって作成された日本統治時代の軍事関係報告書も存在するが、戦後に作成されたため終戦時（1945年8月15日）状況とは異なる可能性が高い。そのため、一定の研究成果はあるものの、新たに公開された史料の調査と分析は進んではいない。『留守名簿』は名簿ごとに記載されている人数、記載方法等は異なる。しかし部隊別の記載内容などから全体像をつかむことは可能だ。

本論では、2件の『留守名簿』を取り上げて調査現状の報告を行う。数ある台湾関係『留守名簿』<sup>4</sup>から第505大隊と第508大隊を選んだ理由は、まずその「特設警備部隊」の存在である。先にも述べたように第10方面軍の隷下では師団及び旅団が、主力となり防衛体制を担っていたが、それとは別に1945年以降多数の特設警備部隊と呼ばれる臨時部隊が各数、編成されている。しかし、特設警備部隊の存在は方面部隊史料などに一部残されているものの、詳細は不明である。次に第505大隊及び第508大隊はいずれも「中等学校の学生」を中心に軍事動員し、編成した部隊である。先行研究として後述するが、台湾においてこれらを編成していた学校の学校史研究が比較的進んでおり、今後『留守名簿』を加えた調査が可能である。既存研究と『留守名簿』の調査結果を比較することもできる。それらの『留守名簿』を調査することで、今後、研究の目的として挙げた台湾防衛体制実態解明の手がかりとなる。

ここで先行研究を整理する。『留守名簿』に関しては、北原道子『北方部隊の朝鮮人兵士 日本陸軍に動員された植民地の若者たち』（現代企画室、2014年）に詳しい。北原（2014）では、1993年に日本政府から韓国の国家記録員に提供された『留守名簿』の分析を通して、朝鮮人兵士動員について実態解明を試みている。しかし、韓国とは異なり、台湾には『留守名簿』は提供されておらず、台湾では『留守名簿』の調査は進んでいない。

<sup>3</sup> 『留守名簿』に関するより詳細な内容は、別論文で執筆予定である。

<sup>4</sup> 国立公文書館に保管されている『留守名簿』の総数は8000件超である。その中で台湾、特設警備部隊関係は110件であり、そのうち52件がすでに公開されている。（2018年2月24日現在）

台湾における先行研究として、徐聖凱「二次大戦末期的學徒兵—以台北高等學校及 13862 部隊為例」（高雄市關懷臺籍老兵文化協會、2013 年）と鄭政誠「戦時體制下臺南師範學校學生的軍事訓練與動員（1937—1945）」（『國史館館刊』、2014 年）<sup>5</sup>が挙げられる。徐（2013）では、台北高等学校に関して丹念に調査されており、これは学校史、口述史研究の成果であるといえる。しかし学生らがどのように戦争の影響を受けていったのかを概略的に述べ、学生動員を分別して論じているにも関わらず、動員された学生を一様に「学徒兵」としており、分別した考察が反映されていない。また、特設警備部隊に動員された学生の部分に関しては、高橋（1998）<sup>6</sup>と同窓会誌等を多く参考としている。それらの調査から彼らの動員を「学校軍隊化」として位置づけているが、その実態の確証を得ることはできない。また筆者は「学校軍隊化」という表現には懐疑的であり、その理由については本文で述べたい。鄭（2014）は、これまで台湾で行われた学校史研究（軍事動員について触れている研究）を列挙した上で、台南師範学校を中心に議論を進めている。1925 年の陸軍現役将校学校配属令に始まる中等学校における軍事訓練の強化から戦争末期の学生動員まで論じられている。また、当時の配属将校らの回想録などを参考にし、台南師範学校の学生らが編成した部隊に関して触れている。

先行研究で挙げた徐（2013）及び鄭（2014）で記載されている学生らの「部隊」は、第 505 大隊及び第 508 大隊である。本論では、それぞれの部隊の『留守名簿』に関して丹念に調査する。これによって、今後、第 505 大隊と第 508 大隊の実態が明らかにするための一助となるだけでなく、学校史として論じられてきた既存研究に対して新たな視座を加えることができる。

## 1. 『留守名簿』の公開と調査手順

まず『留守名簿』について簡単に述べておきたい。『留守名簿』とは、先にも述べたように特定歴史公文書であり、外征部隊所属者の現状と留守関係を明らかにしたものである。兵士の個人情報及びその留守担当者の一覧であり、留守担当者は戦死した際の連絡先でもあった。戦争末期、兵士の数は膨大なものとなり、人事記録の管理のため、陸軍は留守業務と『留守名簿』の作成に取りかかった。軍人及び軍属の身上に関する記録の作成・整理、保存、その家族等に対する俸給その他給与の払い渡し等を所掌した<sup>7</sup>。戦時中に作成された『留守名簿』は、戦後、復員省、厚生省（後、厚生労働省）で保管、管理されていた。

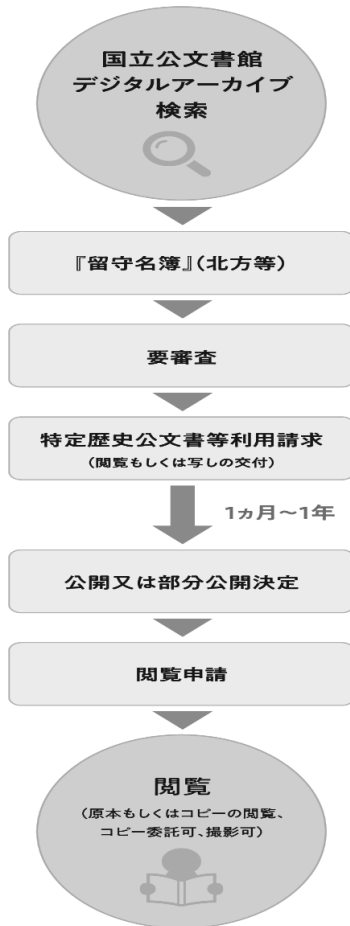
『留守名簿』は、2010 年より「戦没者援護関係史料の国立公文書館への移管」事業の一環として、国立公文書館へと移管された。台湾に関係するものは概ね 2013 年には国立公文書館へ移されている。全体数は、8000 件以上であり、うち台湾に関係するものも 400 件近くある。8000 件以上ある『留守名簿』のほとんどが「要審査」の非公開状態であり、国立公文書館への公開申請手続き後、承認されれば閲覧が可能である。以下、その手順を参考にされたい。

<sup>5</sup> 鄭によれば、徐聖凱：台北高等學校、朱佩琪：台中一中、鄭麗玲：台北工業學校、謝濟全：嘉義農林學校、何義麟・簡宏逸：台北師範學校などの研究で軍事動員に関して触れられている。鄭政誠「戦時體制下臺南師範學校學生的軍事訓練與動員（1937—1945）」（『國史館館刊』、2014 年）160 頁。

<sup>6</sup> 高橋英男『台湾における「学徒兵」召集の実態とその法的背景』（著者、1998 年）。高橋（1998）は、多くの戦史史料や学校史資料から学徒兵の実態とその法的区分に関して丁寧に検討している。本論でも参考となる。

<sup>7</sup> 「陸軍留守業務部令ヲ定ム」『公文類纂』第 69 編昭和 20 年第 14 卷、1945 年（国立公文書館類 02898100、A03010225100）

【公文書館への台湾関係『留守名簿』の公開/閲覧手順<sup>8</sup>】



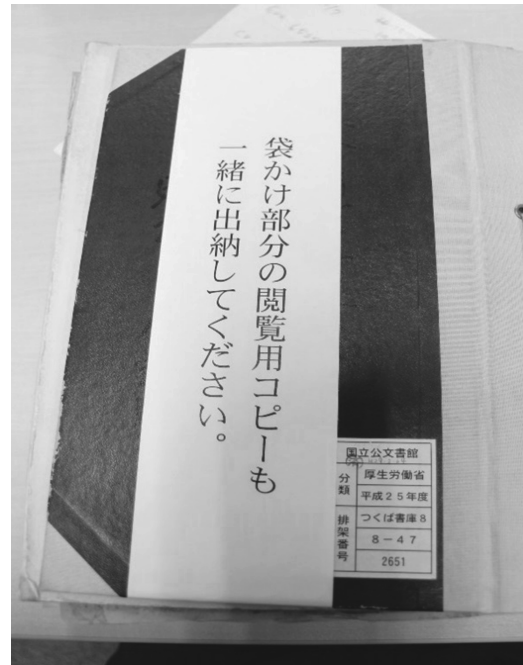
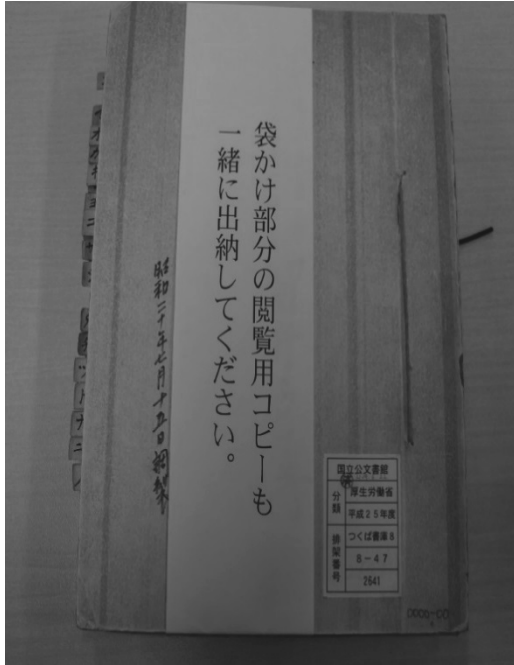
台湾関係ですでに公開もしくは部分公開されているものの多くは、特設警備部隊を中心とし、筆者らが公開申請したものである<sup>9</sup>。

台湾関係の『留守名簿』は、これまで閲覧が制限されており、また先行研究の部分でも述べたように台湾には韓国のように提供はされておらず、国立公文書館への移管により新たに発掘された新史料と言える。これまで、台湾における軍事史、人的動員研究は資料の少なさから、陸軍一般史料と学校史研究や同窓会会報、口述史に頼らざるを得なかったが、『留守名簿』の公開により、新たな事実が判明することになるだろう。

<sup>8</sup> 筆者により作成。台湾関係の『留守名簿』は概ね「北方等」に分類される。

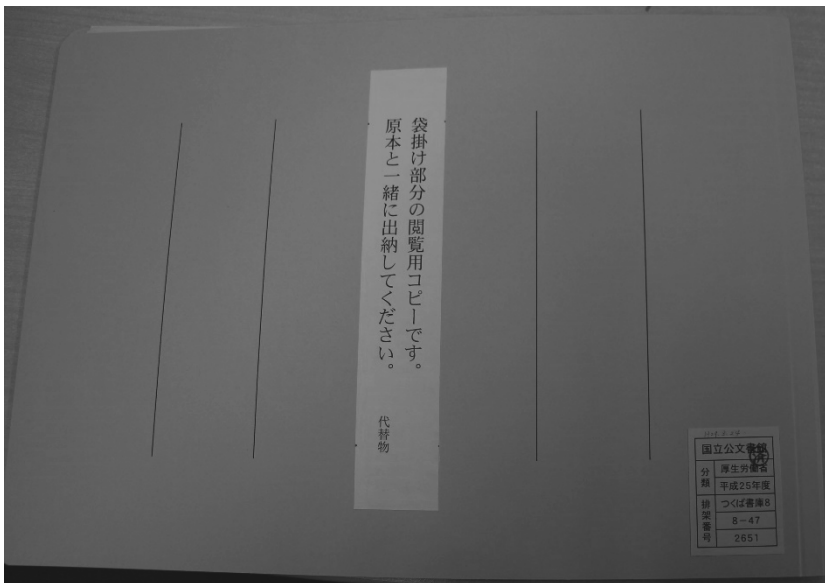
<sup>9</sup> 現在（2018年2月）までに台湾関係の約60件の『留守名簿』が公開（または部分公開）されている。

本論においては、まず『留守名簿』の公開閲覧申請から開始した。国立公文書館に対し、「要審査」状態であった『特設警備第 505 大隊・台湾第 13862 部隊 留守名簿』『特設警備第 508 大隊・台湾第 13872 部隊 留守名簿』の公開を申請した。申請後、半年以内にどちらも「部分公開」の許可が下りた。

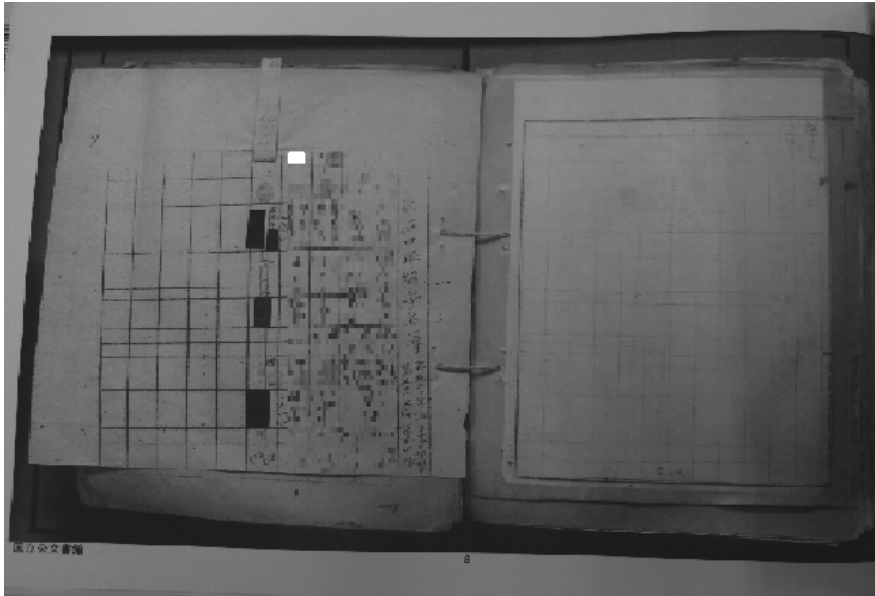


（左：『特設警備第 505 大隊・台湾第 13862 部隊 留守名簿』、右『特設警備第 508 大隊・台湾第 13872 部隊 留守名簿』：国立公文書館東京本館 2017 年 2 月 18 日筆者撮影）

ここで「部分公開」に触れておく。「部分公開」となる主な理由は、留守担当者が「内縁妻」などの場合である。内縁妻などはプライバシーの観点から戦後70年以上経過していても非公開と処理されることにあるようだ。第505大隊の中に1名（予備歩兵伍長）、「内妻」が、第508大隊も同様に1名（二等兵）「内縁妻」がいる。更に第508大隊では、留守担当者が「父」であるにも関わらず、墨塗り処理されている者がいるが、その理由は判明していない。



（『特設警備第 508 大隊・台湾第 13872 部隊 留守名簿』部分公開個所：国立公文書館東京本館  
2017年2月18日筆者撮影）



（『特設警備第 508 大隊・台湾第 13872 部隊 留守名簿』部分公開箇所、墨塗りの一例：国立公文書館東京本館 2017 年 2 月 18 日筆者撮影）

本論においては、2017 年 2 月に、『留守名簿』の保管場所である国立公文書館つくば分館から東京本館へと事前申請の上（閲覧日の 1 週間前が期限）、輸送をしてもらい、東京本館で閲覧及びカメラによる撮影を行った。その後、撮影した写真の内容を全て電子化し、分析を行った。本論では、筆者が作成した整理資料表を基に第 505 大隊及び第 508 大隊の『留守名簿』に関してそれぞれの名簿調整の特色と内容の分析を行う。

『留守名簿』は単なる外征部隊の留守関係事項を整理した名簿ではなく、特に台湾関係、特設警備部隊、学生動員においては、その編成、人的動員の実態がほとんど解明されていない状況の中、重要な一次資料となり得る。また、名簿には留守関係事項の他に、欄外等に重要な記述が残っている場合も多い。詳しくは次章より見ていく。

## 2. 『留守名簿 特設警備第 505 大隊・湾第 13862 部隊』の例

本章では、公開された『留守名簿』の一つである『特設警備第 505 大隊 台湾第 13862 部隊 留守名簿』に着目し、その調査結果を報告する。

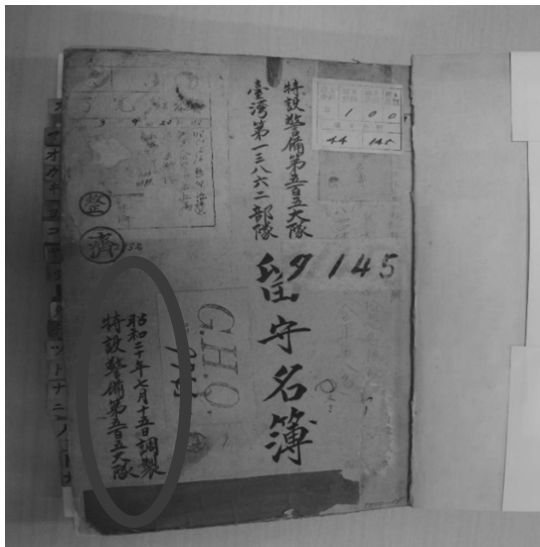
まずは、先行研究等における第 505 大隊に関してまとめる。

第 505 大隊、特に台北高等学校（以下、台北高校）に関しては、学校史など研究が盛んに行われており、徐聖凱「二次大戦末期の學徒兵—以台北高等學校及一三八六二部隊為例」（高雄市關懷臺籍老兵文化協會、2013 年）、徐紹綱「台北高等學校學徒兵的徵召與實態」（國立臺灣師範大學



台湾史研究所碩士論文、2017)、高橋英男『台湾における「学徒兵」召集の実態とその法的背景』(著者、1998年)、がその代表例だ。また第505大隊に所属していた学生らによって作成された資料等から、第505大隊の名簿等<sup>10</sup>も作成されている。これらは、台北高校で行われた第505大隊の編成に関して、丹念に調査され、整理されている。しかし、徐(2013)と徐(2015)は、第505大隊に関する史実概要の個所で、高橋(1998)や卒業生によって作成された資料を多く参考としている。高橋(1998)は、著者の高橋英男氏本人が「間違った個所がある、協力を得た台湾側の情報が間違っていれば、間違っている」と発言している<sup>11</sup>ように、その内容は明らかな事実との相違や不明確な個所が指摘される。徐(2013)、徐(2017)ともに、特設警備部隊についてまとめた表の大部分は、高橋(1998)を参照したものである。

先行研究を整理すると第505大隊は、第66師団隷下にあった特設警備部隊であり、学校軍隊化によって1945年3月20日に台北高校、台北高等商業学校(以下、台北高商)、台北一中、台北三中の学生を以って編成されていた。その内訳は、第1中隊、第5中隊が台北高校、第2中隊が台北高商、第3中隊が台北一中、第4中隊が台北三中である<sup>12</sup>。では、日本政府の公式な史料として新たに発掘された第505大隊『留守名簿』を詳しくみていく。



(『特設警備第505大隊・台湾第13862部隊 留守名簿』: 国立公文書館東京本館 2017年2月18日筆者撮影)

第505大隊の正式名は表紙から「特設警備第505大隊 台湾第13862部隊」である。『留守名簿』の名簿調整日は1945年7月15日となっており、凡そ部隊内の体制が整った段階で作成されたと考えられる。表紙にその他の特記事項はない。

<sup>10</sup> 旧制台北高校昭和二十一年卒業生『對の大屯 わしらが館』(2002年、世話人: 竹内昭太郎他2名) 154-157頁。

<sup>11</sup> 2018年4月6日学士会館(東京・神田)にて、園部逸夫氏が同席の下、高橋英男氏より直接伺った。

<sup>12</sup> 前掲 徐(2013) 118頁表を参照。高橋英男(1998年) 39-45頁。

名簿は2部構成されている。先に、在営した転属者及び戦死者の107名<sup>13</sup>が記載されており、それに続いて「待命者留守名簿」が作成されている。それぞれ、アイウエオ順で作成されている。記載事項は『留守名簿』の様式、基準に沿ったものであり、編入年月日、前所属及び其の編入年月日、本籍（在留地）、留守担当者（住所、続柄、氏名）、徴集年、役種兵種月給額等とその発令年月日、氏名、生年月日である。

まずは、先に記載されている107名を見ていく。107名のうち82名（1名重複記載を含む）は、次に続いている待命者名簿にも名前が記載されている。107名の編入日は、1945年3月20日、4月20日、6月15日等様々である。戦死者も含まれているが、多くは第66師団<sup>14</sup>の隷下部隊<sup>15</sup>から第505大隊へと転属し、活動、戦後（1945年9月2日）再度、第66師団隷下部隊または第10方面軍司令部に復帰した者である。107名の中には配属将校<sup>16</sup>2名を含め、学校関係者も多く、台北一中、台北師範学校、台北高校、台北三中また台北地区の国民学校、他地域の国民学校の関係者などが含まれていた<sup>17</sup>。彼らの役種は、大佐から二等兵まで各々であり、明治中期から大正前半生まれの人々である<sup>18</sup>。

上述の通り、107名のうち82名は、続く待命者名簿にも名前が記載されていたが、残り25名は待命者名簿に記載されていない。そのうち14名は、いずれも1945年3月20日に「現歩二」（現役歩兵二等兵）として、歩兵第304連隊に入隊し、1945年5月20日に第505大隊に転属してきている。107名の中でも、このように同じ部隊から同じ日に転属してきている例はほかにもあるが、「待命者名簿に記載されていない」25名のうち14名も同じような動きをしているというところは特記すべきだろう。末尾資料編にある【表1】に14名の詳細を記載する。

【表1】に記載された14名の多くは1922年～1924年生まれの者であり、後述する待命者（学生）と同様に1945年3月20日に動員されている。彼らは、待命者名簿に記載された学生らと同日に召集されたものの、「学生」としてではなく、徴兵年齢の基準を超えていたため、異なる役種（現役兵）として第66師団の隷下にあった歩兵第304連隊に所属していたとみられる。同年代の現役兵と同様に扱われた可能性が高い。その後、5月20日に第505大隊へと指導者の立場として転属させられた為、待命者名簿には記載されなかったと推察される。また【表1】から以下の2点も読み取れる。

- ①歩兵第304連隊から第505大隊に転属し、待命者名簿に記載されなかったのは、本島出身者である。

<sup>13</sup> うち鹿野信夫（明治45年1月15日生まれ）、台北州台北市堀江国民学校訓導は、重複して記載されているため実際には106名であるが、待命者留守名簿のはじめのページに詳細が記載されており、そこでも107名となっているため本論では107名と記載する。

<sup>14</sup> 第66師団は、南方へ移動する途中、台湾に残留せざるを得なくなった兵員により編成された。南方に行けなくなった兵員に加え、現地の高砂族が加わった。台北及び基隆方面で陣地構築にあっていた。1944年8月花蓮港にて編成完結。近現代史編纂会・編『陸軍師団綜覧』（新人物往来社 2000）210頁参照。

<sup>15</sup> 多くは歩兵第304連隊である。

<sup>16</sup> 1925年、陸軍現役将校学校配属令が発布され、これにより現役軍人が日本国内と植民地の中等学校以上の学校に配属された。彼らが、配属将校である。

<sup>17</sup> 台湾総督府職員録系統（<http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action>）で107名の名前を検索した結果である。2018年3月10日。但し、学校関係者の情報は1944年時点のものである。以下、第508部隊も同様である。

<sup>18</sup> 107名には戦死者も含まれているため、昭和生まれの者もいる。

②台北高等商業学校学生の特質性。

①については、14名のうち5名は日本名であるが、その5名も本籍は台湾であり、改姓名の可能性が高い。第505大隊は、高等教育機関である台北高校、台北高商から中等教育機関である台北一中、台北三中の学生が所属していたが、中等教育機関とは異なり、台北高校や台北高商等の高等教育機関の学生、特に日本人は徴兵猶予が失効した段階で徴兵され、学生らの一斉動員（1945年3月20日）の段階では、本島出身者が多く残った可能性が高い。

②については、14名のうち6名が台北高商の学生であることが判明している。彼らはいずれも1943年4月に入学し、1945年9月25日に卒業した生徒である。彼らの卒業名録には「昭和20年3月20日 学徒隊に入隊」と記されている。台北高商の卒業生データー、とりわけ1945年のものは不足しており、102名の学生がいたであろうことはすでに渡辺（2017）<sup>19</sup>で述べられているが、彼らの在学期間中は未だ謎が多いとされている。しかし第505大隊『留守名簿』の転属者の欄にのみ<sup>20</sup>学生の名前が記載されていたことは、台北高商学生の在学中の召集は、他の学校とは異なる要素があったことが高いことを示している。

ここで「現歩二」という役種に注目すると、待命者名簿にも11名「現歩二」の役種の者が含まれる。彼らはいずれも1926年生まれであり、そのほとんど<sup>21</sup>が台北高校の在学者で、名簿の欄外に「現役入隊の為、召集待命解除 20.7.31」と記載されていた。

以上から、「学生」による編成部隊であるものの、徴兵年齢の基準を超えた学生は現役兵として扱われ、その中でも、先に別部隊で現役兵となり第505大隊に転属した者、第505大隊に第二国民兵役二等兵として召集された後に、7月に現役兵とし待命を解除された者と様々である。

次に待命者の名簿である。待命者名簿には新たに表紙があり、「特設警備第505大隊 台湾第13862部隊 待命者留守名簿」（昭和20年9月3日復員完結）と記載されている。先に記載されている転属者のうち82名は待命者名簿にも記載がある。

待命者留守名簿	
1、1695名	
2、在営シアラサルモノ	
内訳 依 病召集解除	} 計 107名
即日帰郷者	
不應召者	
召集解除	
合計：1802名	

<sup>19</sup> 渡辺邦博「未完成の学籍簿と卒業論文名録—台北高等商業学校の場合—」（『桃山学院大学経済経営論集』第59巻第3号、2017年12月）では、台北高等商業学校の学籍簿と卒業論文に関する謎の解明を試みている。  
<sup>20</sup> 『台湾総督府台北高等商業卒業生第24至第25回名録（1944-1945）』と『留守名簿』を照し合わせたか、現在までに転居者欄以外の記載はみられない。今後も調査を続けていく。  
<sup>21</sup> 1名のみ、台北高校の卒業生（1945年3月）で、「召集解除」と記載されていた。

備考 名簿欄外の下に記入しある事項左記の通り

- 1 依病召集解除は昭 20. 7. 31 の者
- 1 即帰は S20. 3. 20 より S20. 7. 31 間の者
- 1 役種兵種官等欄の空欄の者は待命中にして入隊しあらさるもの（不應召と記しある分）
- 1 召集解除は防衛教育召集解除のもの

待命者名簿には約 1200 名<sup>22</sup>の名前が確認できる。そのほとんどは、大正後期～昭和前半（1925 年～1931 年）生まれである。ここから、第 505 大隊は、人員のほとんどが学生で編成され、徴兵年齢の基準に依らない召集が行われていたことが読み取れる。それ以外に、詳細は後述するが明治後半～大正前半生まれの者も含まれる。待命者の編入日は、1945 年 3 月 20 日が最も多いが、7 月 5 日にも追加召集されている。彼らの兵士としての身分は、「二國歩二」（第二国民兵役歩兵二等兵）が最も多い。名簿はアイウエオ順で作成されているのみであり、「中隊」ごとの整理はされていない。現在確認までに確認ができたものは台北高校の学生が 339 名含まれているということである<sup>23</sup>。「現歩二」に関する指摘でも言及したが、名簿には、徴兵年齢の基準を越え、待命召集から現役入隊となった者や臨時召集や転属した者についても欄外に詳しく記載されている。

待命者名簿には、明治後半から大正前半生まれの者が 150 名以上含まれている。うち、85 名が学校関係者であり、末尾資料編にある【表 2】は学校ごとに整理した表である。

【表 2】から、第 505 大隊の中心が既存研究等でも明らかにされているように台北高校、台北高商、台北一中、台北三中であったことが分かる。しかし、それ以外の学校関係者も多く含まれていることを指摘しておかなければならない。その中には、台北だけではなく、台湾全土の学校関係者が含まれている。部隊の編成方法は、学校単位ではあるが部隊を編成していた学校の学校関係者以外も多く含まれている。また、学生部隊では、教師など学校関係者がその部隊の指揮命令系統であることが多いが、第 505 大隊に関しては、学校関係者が学生と同様に第二国民兵役二等兵の身分である。

章の初めに整理したように、先行研究を整理すると第 505 大隊は、第 66 師団隷下にあった特設警備部隊であり、学校軍隊化によって 1945 年 3 月 20 日に台北高校、台北高商、台北一中、台北三中の学生を以って編成されていた。その内訳は、第 1 中隊、第 5 中隊が台北高校、第 2 中隊が台北高商、第 3 中隊が台北一中、第 4 中隊が台北三中である。

しかし、『留守名簿』の調査を通して、筆者は以下の点に関して疑問を残している。

①第 505 大隊は第 66 師団の「隷下」部隊であったのか。「指揮下」ではないのか。

既存研究では、第 505 大隊は、第 66 師団の隷下にあり、所属していたとされる。第 505 大隊『留守名簿』を見ていくと、前所属及び転属先が第 66 師団の隷下部隊である事例は多い。しかし、第

<sup>22</sup> 筆者が撮影した『留守名簿』を整理し、確認作業を行ったが間違いがないとは言えないため「約」1200 名とした。

<sup>23</sup> 徐聖凱整理・提供『台北高等學校 日籍畢業生名冊』を参照。但し、未刊行の整理表である。

66師団の隷下にあった部隊は、第66師団の通称号「敢」を付けて「敢〇〇〇部隊」と記述されるのが通例であるが、13862部隊についている通称号は台湾軍(当時の第10方面軍)を示す「台湾」であり、陸軍史料において「敢」がついた記述は管見の限り存在しない。このような例は他の部隊にも見られる。ここから筆者は、特設警備部隊が「隷下」ではなく、第10方面軍直属の部隊であり、ただしその指揮は師団が行っていたと推察している。①の議論に関しては、今後の課題として追及していく予定だ。

## ②学校関係者の動き

『留守名簿』を通して、部隊を編成していた学校以外の学校関係者の動きが一部明らかになった。また、部隊には部隊を編成していた学校以外の学校関係者も含まれていることが判明した。

## ③学校単位、召集日、学校軍隊化

先行研究では、台北高校、台北高商、台北一中、台北三中の学生によって編成されていたとされたが、その実態は、単に各学校の学生を同様に召集したわけではない、台北高商の学生が現役入隊後、転属した例や召集日も2回に分けられている。

筆者は、②、③から、先行研究が述べてところの「学校軍隊化」、学校を軍隊化したものであるという議論には否定的である。

詳細な先行研究が台北高校に限定されていることもあり、未だ不明確な点も多いが、これまでの貴重な研究功績に『留守名簿』という公式史料を以って議論を進めることでより、実態がより明確になるだろう。

## 3. 『留守名簿 特設警備第508大隊・湾第13872部隊』の例

本章では、公開された『留守名簿』の一つである『特設警備第508大隊 台湾第13872部隊 留守名簿』に着目し、その調査結果を報告する。

まずは、先行研究における第508大隊に関して述べる。鄭(2014)によると、第508大隊は、1945年3月20日に台南地区の各中等以上の学校により特設警備部隊として組織され、第1中隊台南高等工業学校、第2中隊台南師範学校、第3中隊台南一中及び台南二中、第4中隊台南工業学校、台南農業学校及び長榮中学校の4中隊であった<sup>24</sup>。しかし、鄭(2014)の議論は、台南師範学校、「綱島隊」の例が大部分であり、第508大隊全体の実態は上記の内訳に留まっている。

では、第508大隊の『留守名簿』を見ていく。

第508大隊の『留守名簿』には、表紙裏に以下のような記載がされている。

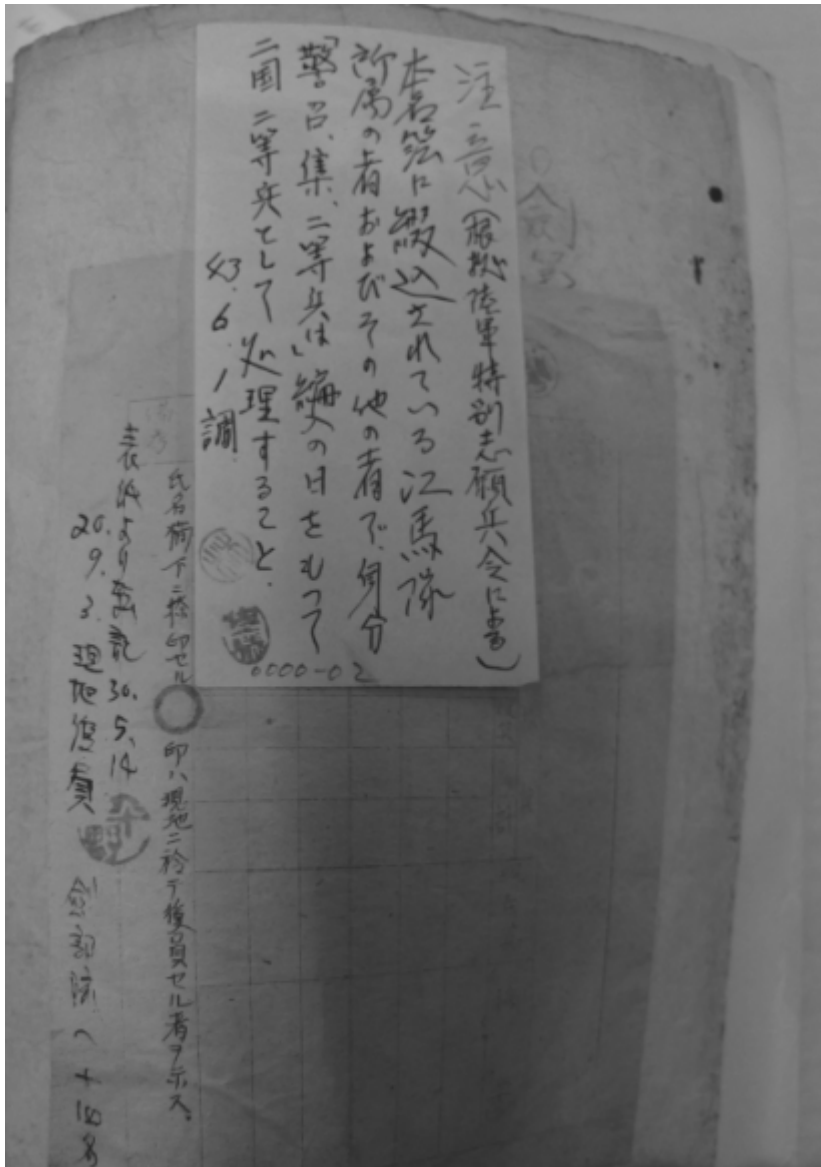
<sup>24</sup> 鄭政誠「戦時體制下臺南師範学校學生的軍事訓練與動員(1937-1945)」(『國史館館刊』、2014年)177頁を引用。

注意 (根拠陸軍特別志願兵令による)

本名簿に綴込されている江馬隊所属の者およびその他の者で身分

「警召集二等兵」は編入の日をもって二国二等兵として処理すること

43.6.1 調



(『特設警備第 508 大隊・台湾第 13872 部隊 留守名簿』: 国立公文書館東京本館 2017 年 2 月 18 日筆者撮影)

第508大隊は、第505大隊と同様にその人員のほとんどは学生であり、編成当時、徴兵年齢の基準に依らない召集が行われていた。上記の記述は、戦後、何らかの理由<sup>25</sup>で戦後、厚生省の担当者によって学生の召集とその法的背景に関して記載されたものであると推察される。<sup>26</sup>

第508大隊『留守名簿』は、本部～福島隊までアイウエオ順で作成され<sup>27</sup>、記載事項は第505大隊と同様に『留守名簿』の様式、基準に沿ったものであり、編入年月日、前所属及び其の編入年月日、本籍（在留地）、留守担当者（住所、続柄、氏名）、徴集年、役種兵種月給額等とその発令年月日、氏名、生年月日である。約2000名の名前が記載されているがそのほとんどは、大正後期～昭和前半（1925年～1931年）生まれである。転属者に関しては、名簿開始前に別紙で特記されている。編入日は、その大部分が1945年3月20日であり、1945年4月1日に追加召集された者も多くいる。徴兵年齢基準の関係で、現役として召集された者もいる。彼らの身分は、「二國二」（第二国民兵役二等兵）、「現二」（現役二等兵）、「二國二等兵」（第二国民兵役二等兵）、「警召二」（警備召集二等兵）、「現歩二」（現役歩兵二等兵）、「二國歩二」（第二国民兵役歩兵二等兵）等、様々である。第508大隊は、同一の役種であっても各中隊でその記載方法が異なる<sup>28</sup>。

第508大隊『留守名簿』は、第505大隊とは異なり各中隊でその名簿の作成が行われていたようである。名簿では、様々な用紙が使われており、台南工業専門学校、台南一中、台南二中などは学校の名前が入った専用用紙が使用されている。そのため、上記のように中隊ごとに記載方法が異なっている。

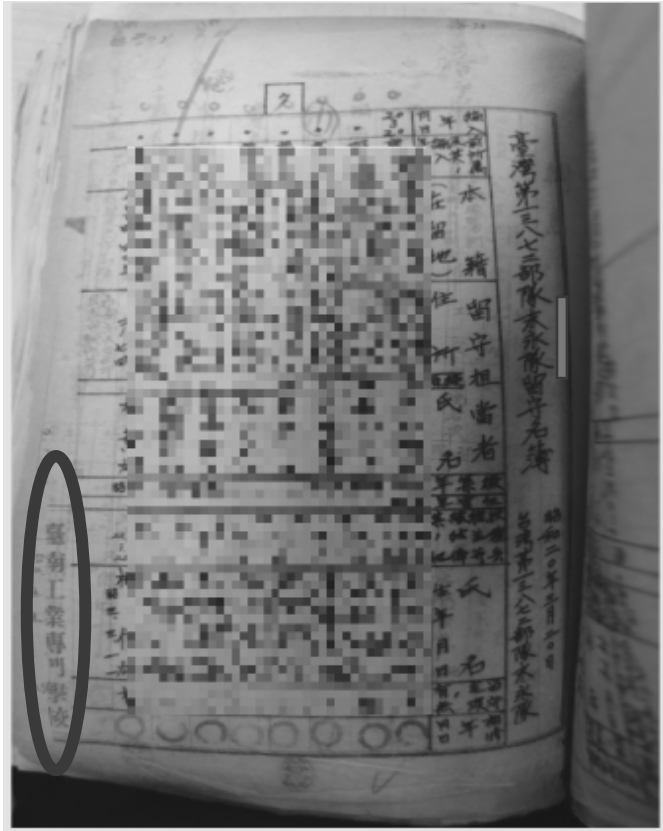
また、名簿の中には、「本部」、「末永隊」、「江馬隊」、「綱島隊」、「野口隊」、「大村隊」、「福嶋隊」と記載されており、それぞれ中隊長の名前からつけられたものであると考えられる。

<sup>25</sup> 理由は不明であるが、当該部隊の所属者からの申告などでも修正されることがある。

<sup>26</sup> そのため、第508大隊の『留守名簿』は「(学徒)」として分類されている。

<sup>27</sup> 例：ア行本部～福島隊、イ行本部～福島隊、ウ行本部～福島隊という順番で作成されている。

<sup>28</sup> 「二國二」、「二國二等兵」、「二國歩二」などは、第二国民兵役二等兵と書き方は異なるがその役種は同じである。また、一斉召集された学生の役種が学校ごとに異なっていたとは考えにくく、記載方法の違いである。



（『特設警備第 508 大隊・台湾第 13872 部隊 留守名簿』：国立公文書館東京本館 2017 年 2 月 18 日筆者撮影）

先述したように第 508 大隊人員のほとんどは学生であるが、中には、明治後半から大正前半生まれの者も含まれる。そのうち 66 名が学校関係者である。末尾資料編【表 3】は、部隊ごとにその詳細を整理したものだ。

【表 3】に記載されたうち末永大吉（台南高等工業学校講師）、網島竹治（台南師範学校助教授）、江馬道生、大村栄蔵、野口藤次郎（台南州台南第一青年学校指導員）、福嶋茂雄（台中州警察部理蕃課技手）は、中尉、少尉、曹長という比較的高い階級であり、名簿上の〇〇隊と記載された人物であり、各部隊の部隊長となった人物であろう。このように、第 508 大隊では学校関係者（指導者）が、隊の長となり、それぞれの単位（恐らく学校ごとに）学生部隊を編成していたことが分かる。

以上、『留守名簿』の分析から第 508 大隊の詳細は以下であると推察できる。



## 【第508大隊内訳】

	部隊名	学校
本部		
第1中隊	行李隊・末永隊	台南工業専門学校 <sup>29</sup> (台南高等工業)
第2中隊	網島隊	台南師範学校
第3中隊	江馬隊	台南一中
第4中隊		台南二中
第5中隊		
第6中隊	野口隊・機関銃隊	台南第一青年学校
第7中隊	学徒隊・学徒大村 隊・学徒患者輸送隊	台南農業学校
第8中隊		台南高等工業学校
第9中隊	福嶋隊	台南工業学校

先にも述べたように『留守名簿』はア行本部～福嶋隊、イ行本部～福嶋隊といった順番にそれぞれの部隊で異なる用紙を使用して作成されている。数字で○中隊と記載されていたのは、本部の他、第4中隊と第5中隊のみであるが、名簿の作成順番と本部、第4中隊、第5中隊から筆者の判断で中隊を分別した。

第1中隊は、「台南工業専門学校」の専用用紙を使用して名簿が作成されており、そこには「行李隊」「末永隊」と記載されている。「末永隊」とは、台南高等工業学校講師であった末永大吉が率いていた部隊であることから、「台南工業専門学校」（台南高等工業学校）の学生部隊であるとした。第2中隊の『留守名簿』には、「網島隊」と記載されており、台南師範学校助教授であった網島竹治が率いていた部隊であることから、「台南師範学校」の学生部隊であるとした。第3中隊は、「台南州立台南第一中学校（台南一中）」の学校専用用紙が使用されており、江馬道生が率いた「江馬隊」である。江馬道生に関しては、詳細な身分などは不明であるが、「台南一中」学生部隊であると考えられる。第4中隊の『留守名簿』では、「台南州立台南第二中学校（台南二中）」の学校専用用紙が使用されており、そこには「第四中隊」と記載されている。そこから、「台南二中」学生部隊であるとした。第5中隊は、名簿に「第五中隊」と記載されているが、そこに含まれた学校関係者は国民学校の関係者のみであり、その実態は不明である。第6中隊には、「野口隊」「機関銃隊」と記載されており、これは台南第一青年学校指導員で野口藤次郎の率いていた部隊であることから「台南第一青年学校」の学生部隊とした。第7中隊は主に「学徒隊」「学徒大村隊」

<sup>29</sup> 台南高等工業学校は、1944年4月に台南工業専門学校と改名している。1945年の資料は少なく台湾総督府職員録系統などは1944年時点のものであるため、本文では台南高等工業と記載した。

「学徒患者輸送隊」と記載されており、大村栄蔵が率いていた部隊であるが、大村栄蔵に関しては江馬同様、身分の詳細が不明である。しかし、第七中隊に含まれていた学校関係者の多くが台南農業学校の関係者であったことから、「台南農業学校」の学生部隊であるとした。第8中隊は、『留守名簿』の用紙や記述に手がかりは少ないが、そこに含まれていた学校関係者の多くが台南高等工業学校の関係者であることから「台南高等工業学校」の学生部隊であるとした。最後に第9中隊は、「福嶋隊」と記載されており、これは台中州警察部理蕃課技手であった福嶋茂雄が率いていた部隊であり、部隊に含まれていた学校関係者等から「台南工業学校」の学生部隊とした。

以上、先行研究では4中隊とされていた第508大隊は『留守名簿』の調査をとおして、9つに分けられ、また学校ごとの内訳も判明した。

第508大隊『留守名簿』は、各学校でその作成が行われた可能性が高いため、第505大隊『留守名簿』に比べ、名簿内の情報量が多い。また、彼らに対しては、徴兵年齢に依らない召集が行われており、召集方法が法的な部分で問題が出てくることが名簿外に後書きされた「根拠 陸軍特別志願兵令による」から読み取れるだろう。

## おわりに

本論は、2013年新たに公開された台湾関係の『留守名簿』に関して、特設警備第505大隊『留守名簿』及び特設警備第508大隊『留守名簿』調査現状を報告するものである。

『留守名簿』は、特定歴史公文書であり、戦前の外征部隊所属者の現状と留守関係事項を明らかにしたものである。戦時中に留守業務部によって作成された『留守名簿』は、戦後復員省、厚生省（後、厚生労働省）で保管、管理されていた。2010年、戦後70周年を機に国立公文書館へと移管され、台湾関係は2013年に概ね、非公開状態ではあるが「要審査」となり、「公開」申請が可能となった。

本論では、第505大隊と第508大隊を事例として取り上げた。『留守名簿』は、一応の作成様式はあるものの、部隊ごとにその作成方法の大きな違いがあることが判明した。

第505大隊に関しては、台北高校など既存研究が盛んであるが、そこでは戦争末期の動員した側の公式史料が不足しており、部隊に関する実態の内容は「兵士の体験」などに依るものも多く、確証が得られない個所は少なくない。既存研究では第66師団隷下の特設警備部隊で1945年3月20日に人員が召集されるとされてきたが、筆者は、『留守名簿』の調査を通して、「第66師団の隷下」部隊であったということに疑問をもち、また召集日の違いや、徴兵年齢の基準により学校ごとに異なる召集例があることを示した。このような実態は『留守名簿』を調査したことで判明した。また、彼らの召集は、「学校軍隊化」と議論されてきたが、実際には第505大隊に召集された学校以外の学校、地区の学校関係者が部隊に所属している、学校ごとの特殊例などから「学校軍隊化」とは言えない状況であっただろう。

第508大隊に関しては、『留守名簿』から新たな事実が多く発見され、部隊の詳細な中隊、学校など内訳等も推察が可能であった。名簿の作成用紙に学校専用紙を使用しているなどの特色も

みられた。また、学生動員の法的な背景に言及できるような記載もあり、今後の研究発展に期待がもてる調査であった。

2冊の『留守名簿』を調査したことで、既存研究に動員した側の日本政府の公式史料からの調査という新たなアプローチが可能であることを言及しただけではなく、戦争末期の台湾での学生、教員らの動きも一部明らかになった。特設警備部隊は、「学徒」を中心として添えられてきたが、通常では兵隊として召集できないような人々であり、そこから末期の体制を垣間見ることができる<sup>30</sup>。

以上、未だ不明点や疑問点も多いが、今後、『留守名簿』の調査を継続していくことで学生によって編成された特設警備部隊の実態を明らかにし、戦争末期の台湾の防衛体制をより明確にすることが期待される。

## 参考文献

北原道子『北方部隊の朝鮮人兵士 日本陸軍に動員された植民地の若者たち』（現代企画室、2014年）

旧制台北高校昭和二十一年卒業生『對の大屯 わしらが館』（2002年、世話人：竹内昭太郎他2名）  
近現代史編纂会・編『陸軍師団綜覧』（新人物往来社 2000）

徐紹綱「台北高等學校學徒兵的徵召與實態」（國立臺灣師範大學台灣史研究所碩士論文、2017）

徐聖凱「二次大戰末期的學徒兵—以台北高等學校及 13862 部隊為例」（高雄市關懷臺籍老兵文化協會、2013年）

台湾総督府職員録系統

『台湾総督府台北高等商業卒業生第24至第25回名録（1944-1945）』

高橋英男『台湾における「学徒兵」召集の実態とその法的背景』（著者、1998年）

鄭政誠「戦時體制下臺南師範學校學生的軍事訓練與動員（1937-1945）」（『國史館館刊』第41期、國史館、2014年）

『特設警備第505大隊・台湾第13862部隊 留守名簿』

『特設警備第508大隊・台湾第13872部隊 留守名簿』

渡辺邦博「未完成の学籍簿と卒業論文名録—台北高等商業学校の場合—」（『桃山学院大学経済経営論集』第59巻第3号、2017年12月）

<sup>30</sup> それは、「根こそぎ動員『的』」な性格を有している。「根こそぎ動員」に関して、日本本土は学徒出陣という形に留めており、行われていないと認識されているが、例えば満洲の「根こそぎ動員」は、定着しつつある。満洲のように、多くの人員を集めたわけではないが、台湾でも1945年3月以降は軍に人々が集められてしまい社会機能が停止してしまっている。出せる者を「出している」状態だ。ここでは根こそぎ動員「的」という言葉に留めたい。

<資料編<sup>31</sup>>

【表 1<sup>32</sup>】

編入日	前所属/編入日	徴集年	役種	氏名/生年月日/その他
S20. 5. 20	歩第 304 連隊 S20. 3. 20	S19	現歩二 S20. 3. 20	大石和義 T13. 3. 1 台北貯金管理所計理課雇
S20. 5. 20	歩第 304 連隊 S20. 3. 20	S17	〃	大田周治 T11. 6. 26
S20. 5. 20	歩第 304 連隊 S20. 3. 20	S17	〃	郡山政彦 T11. 6. 1
S20. 5. 20	歩第 304 連隊 S20. 3. 20	S19	〃	黃國雄 T11. 8. 23 台北高等商業学校 学生
S20. 5. 20	歩第 304 連隊 S20. 3. 20	S19	〃	蔡惠然 T13. 8. 27 台北高等商業学校 学生
S20. 5. 20	歩第 304 連隊 S20. 3. 20	S19	〃	田村松壽（陳寶松） T13. 11. 2 台北高等商業学校 学生
S20. 5. 20	歩第 304 連隊 S20. 3. 20	S19	〃	田中賢一（劉賢英） T13. 9. 12 台北高等商業学校 学生
S20. 5. 20	歩第 304 連隊 S20. 3. 20	S18	〃	廣田義高 T12. 4. 30
S20. 5. 20	歩第 304 連隊 S20. 3. 20	S17	〃	松川光雄 T11. 3. 30 花蓮港庁旭国民学校 訓導
S20. 5. 20	歩第 304 連隊 S20. 3. 20	S19	〃	楊瑞耀 T12. 12. 7 台北高等商業学校 学生
S20. 5. 20	歩第 304 連隊 S20. 3. 20	S17	〃	楊進火 T11. 9. 7 専門学校 合格者
S20. 5. 20	歩第 304 連隊 S20. 3. 20	S15	〃	廖丁福 T9. 3. 4 台中州大楊国民学校 助教
S20. 5. 20	歩第 304 連隊 S20. 3. 20	S19	〃	劉錦榮 T13. 10. 30 台北高等商業学校 学生
S20. 5. 20	歩第 304 連隊 S20. 3. 20	S19	〃	李登義 T13. 11. 11

<sup>31</sup> 表は『留守名簿』台湾総督府職員録系統の調査を中心に加筆したものだ。しかし、1945年の情報はなく、1944年のものである。

<sup>32</sup> 前掲 台湾総督府職員録系統及び台湾総督府台北高等商業卒業生第24至第25回名録（1944-1945）より作成。

【表 2<sup>33</sup>】

台北高等学校 (15名)

編入日	前所属	本籍	役種	氏名/生年月日/肩書
S20. 3. 20	鹿児島 (台北)	鹿児島県 (台北州)	二國歩二 S20. 3. 20	伊地知潔 T元. 11. 6 台北高等学校 生徒主事補
S20. 3. 20	東京 (台北)	東京都 (台北州)	二國歩二 S20. 3. 20	犬養孝 M40. 4. 1 台北高等学校 教授
S20. 4. 1	東京 (台北)	東京都 (台北州)	二國歩二	石本岩根 M36. 12. 24 台北高等学校 教授
S20. 4. 1	奈良	奈良県 (台北州)	二國歩二 S20. 4. 1	太田頼常 M35. 9. 6 台北高等学校附置臨時教員 養成所 講師
S20. 3. 20	札幌 (台北)	札幌市 (台北州)	二國歩二 S20. 4. 1	小山捨男 M34. 3. 15 台北高等学校附置臨時教員 養成所 講師
S20. 3. 20	東京 (台北)	東京都 (台北州)		太田広 M39. 11. 10 台北高等学校 教諭 高雄州知事官房文書課 雇
S20. 4. 1	奈良 (台北)	奈良県 (台北州)	二國歩二 S20. 4. 1	太田頼常 M35. 6. 6 台北高等学校附置臨時教員 養成所 講師
S20. 4. 1	鹿児島 (台北)	鹿児島県 (台北州)	二國歩二 S20. 3. 20	木藤才蔵 T4. 3. 29 台北高等学校 教諭
S20. 4. 20 重複：臨 召に付留 守名簿に 移記	敢 1786 部隊 S20. 4. 1	広島県 (台北州)	予歩少尉准 一 S3. 4. 25	杉原秀義 M28. 4. 1 台北高等学校 教諭
S20. 4. 1	長野 (台北)	長野県 (台北州)	二國歩二 S20. 4. 1	瀧澤壽一 M44. 10. 12 台北高等学校 生徒主事
S20. 3. 20	富山 (台北)	富山県 (台北州)	二國歩二 S20. 3. 20	高峯一恵 M29. 4. 16 台北高等学校

<sup>33</sup> 前掲 台湾総督府職員録系統より作成。

S20. 3. 20 臨召ニ付 留守名簿 ニ移記	第十方面軍司令部（原職、儘）	島根県（台北州）	予歩少尉 S4. 3. 31	常松始郎 M36. 2. 18 台北高等学校 教授
S20. 4. 1	岐阜	岐阜県（台北州）	二國歩二 S20.	服部博 M35. 6. 6 台北高等学校附置臨時教員養成所 講師
S20. 4. 1	千葉（台北）	千葉県（台北州）	一補	福山伯明 M45. 12. 29 台北高等学校 教諭
S20. 3. 20 従七佳 瑞七 旭八	神戸（台北）	兵庫県（台北州）	予輜重軍二 S18. 3. 1	松本邦夫 M44. 2. 17 台南州州立嘉義中学校教諭/ 台北高等学校 教授兼教諭

台北高等商業学校（10名）

S20. 4. 1	福岡（台北）	福岡県（台北州）	二國歩二	石橋憲治 M38. 5. 24 台北高等商業学校 教授 台北州州立台北商業学校 嘱託
旭八 S20. 3. 20	徳島（台北）	徳島県（台北州）	一補歩兵 S17. 6. 1	梅枝軍二 T2. 9. 30 台北高等商業学校 書記
S20. 3. 20	東京（台北）	東京都（台北州）	二補歩一 S14. 9. 1	小崎忠嘉壽 T4. 9. 13 台北高等商業学校 訓導
S20. 3. 20	熊本（台北）	熊本県（台北州）	一補歩一 S14. 7. 1	小島伊三男 T3. 6. 4 台北高等商業学校 教授
S20. 3. 20	金澤（台北）	石川県（台北州）	二國歩二 S20. 3. 20	塩谷厳三 M36. 9. 23 台北高等商業学校 教授
S20. 3. 20	名古屋（台北）	愛知県（台北州）	二國歩二 S20. 3. 20	杉浦治七 M37. 9. 6 台北高等商業学校 教授
S20. 3. 20	東京（台北）	東京都（台北州）	二國歩二 S20. 3. 20	長島文道 T4. 1. 21 台北高等商業学校 助教授
S20. 3. 20 留守名簿 ニ移記	第十方面軍司令部（原職） S19, 11, 1	香川県（台北州）	特志予歩 大佐 S19. 10. 2	鍋島秀夫 M21. 4. 30 台北高等商業学校、台北師範 学校 配属将校
S20. 3. 20	大阪（台北）	大阪府（台北州）	二國歩二 S20. 3. 20	廣橋次郎 M45. 4. 20 台北高等商業学校 教授

S20. 3. 20	佐賀（台北）	佐賀県（台北州）	二國歩二 S20. 3. 20	松尾弘 M40. 3. 19 台北高等商業学校 教授
------------	--------	----------	--------------------	-------------------------------

台北商業（2名）

S20. 4. 7	宇都宮（台北）	栃木県（台北州）	一補歩二 S20. 4. 7	香坂順一 T4. 6. 7 台北州州立台北商業学校 嘱託
S20. 3. 20	東京（台北）	東京都（台北州）	二國歩二 S20. 3. 20	本橋春光 M38. 11. 28 台北州州立台北商業学校 嘱託

台北師範学校（1名）

S20. 3. 20 臨召二付 留守名簿二 移記	第十方軍司 （原職）	千葉県（台北州）	予歩中尉 S20. 4. 20	宮崎操 M42. 6. 30 台北師範学校 助教授
-----------------------------------	---------------	----------	--------------------	------------------------------

台北師範予科（1名）

S20. 3. 20	第十方面軍 司令部 S19. 11. 1	福岡県（台北州）	予歩中尉二 S20. 4. 21	白川蕃 M36. 5. 8 台南師範学校予科 教諭
------------	----------------------------	----------	---------------------	------------------------------

台北第一中学校（11名）

S20. 3. 20	鹿児島（台北）	鹿児島県（台北州）	補歩二 S20. 3. 20	井島六助 M41. 11. 11 台北州州立台北第一中学校 教諭
S20. 3. 20	広島（台北）	広島県（台北州）	二國歩二 S20. 3. 20	上畑輝義 M34. 9. 11 台北州州立台北第一中学校 教諭
S20. 3. 20	新潟（台北）	新潟県（台北州）	二國歩二 S20. 3. 20	小田三次 M25. 12. 18 台北州州立台北第一中学校 教諭
S20. 3. 20	前橋（台北）	群馬県（台北州）	予歩伍 S6. 8. 31	大山薫 M44. 6. 8 台北州州立台北第一中学校 教諭
S20. 3. 20	新潟（台北）	新潟（台北）	二國歩二 S20. 3. 20	小倉久雄 M38. 5. 8 台北州州立台北第一中学校 教諭

公開された台湾関係『留守名簿』調査（小野 純子）

S20. 4. 20	敢 1786 S20. 4. 1	長崎県（台北州）	予歩伍 S9. 8. 31	木村武義 T3. 3. 6 台北州州立台北第一中学校 教諭
S20. 3. 20	大分（台北）	大分県（台北州）	二國歩二 S20. 3. 20	古屋次庫 M41. 6. 18 古屋次 雄？ 台北州州立台北第一中学校 教諭
S20. 3. 20	山形（台北）	山口県（台北州）	予歩伍 S13. 8. 1	柴田重蔵 M36. 3. 22 台北州州立台北第一中学校 教諭
S20. 3. 20	大分（台北）	大分県（台北州）		立川武夫 M41. 2. 24 台北州州立台北第一中学校 教諭
S20. 3. 20	佐賀	佐賀県（台北州）	一補歩二 S20. 3. 20	手島道生 T2. 11. 23 台北州州立台北第一中学校 教諭
S20. 4. 20 臨召ニ付 留守名簿ニ 移記	敢第 1786 部隊 S20. 4. 1	鳥取県（台北州）	予歩中尉二 S15. 3. 9	松井泰治 M43. 2. 3 台北州州立台北第一中学校 嘱託

台北第三中学校（9名）

S20. 3. 20	神戸（台北）	兵庫県（台北）	予歩伍 S7. 8. 31	伊丹豊三 T元. 8. 2 台北州州立台北第三中学校 嘱託
S20. 3. 20	横濱（台北）	神奈川県（台北州）	二國歩二 S20. 3. 20	北原三郎 M42. 8. 22 台北州州立台北第三中学校 教諭
S20. 3. 20	佐賀（台北）	佐賀県（台北州）	二國歩二 S20. 3. 20	小柳九州男 M38. 9. 2 台北州州立台北第三中学校 教諭
S20. 4. 20 臨召ニ付ニ 守名簿ニ記	敢第 1786 部隊 S20. 4. 1	鹿児島県（台北州）	予歩中尉二 S17. 8. 20	津田武敏 T7. 6. 10 台北州州立台北第三中学校 嘱託
S20. 3. 20	山口（台北）	山口県（台北州）	二國歩二	林秀介 T2. 11. 5



			S20. 3. 20	台北州州立台北第三中学校 教諭
S20. 4. 20 臨召ニ付留 守名簿ニ移 記	敢第 1786 部隊 S20. 4. 1	佐賀県（台北州）	予衛伍 S17. 12. 1	福成和夫 T5. 1. 18 台北州州立台北第三中学校 教諭
S20. 4. 1 従六	廣島（台北）	廣島県（台北州）	二國歩二 S20. 4. 1	福田巖 M39. 5. 5 台北州州立台北第三中学校 教諭
S20. 4. 1	鳥取	鳥取県（台北州）	一國歩伍 S6. 8. 31	政田二郎 M44. 11. 18 台北州州立台北第三中学校 教諭
S20. 4. 1	福岡（台北）	福岡県（台北州）	予歩伍 S5. 8. 31	山田寶造 M41. 8. 24 台北州州立台北第三中学校 嘱託

台北第四中学校（1名）

S20. 3. 20 旭八	熊本（台北）	熊本県（台北州）	一補歩上 S14. 4. 1	松岡虎男 M42. 8. 22 台北州州立台北第四中学校 教諭
------------------	--------	----------	-------------------	---------------------------------------

その他、国民学校等（35名）

S20. 3. 20	長崎（台北）	長崎（台北）	予歩伍 S10. 8. 31	岩永一夫 T2. 11. 12 海軍兵志願者訓練所普通学 部 教官
S20. 6. 15	歩 305 S20. 5. 31	宮崎県	現役兵科甲 幹 S19. 8. 10	井上敏美 T11. 12. 20 台中州土牛国民学校 訓導
S20. 3. 20	大阪（台北）	大阪府（台北州）	予歩伍 T7. 8. 1	今井喜一 T7. 1. 18 台南州白河西国民学校 訓 導（1942）
S20. 3. 20	佐賀（台北）	佐賀県（台北州）	予歩伍 S8. 8. 30	池田栄治 T2. 1. 2 台中師範学校付属国民学校 訓導（1942）
S20. 3. 20	奈良（台北）	奈良県（台北州）	二國歩二 S20. 3. 20	上野俊夫 T10. 1. 20 台北州頭園国民学校 訓導

公開された台湾関係『留守名簿』調査（小野 純子）

				(1942)
S20. 4. 20	敢第一隊 S20. 4. 1	大分県（台北州）	予歩伍 S8. 8. 31	河野一 T 元. 12. 24 台北州台北市市旭国民学校 訓導
S20. 3. 20	仙台	宮城県（台北州）	予歩伍 S8. 8. 31	鹿野信夫 M45. 1. 15 台北州台北市堀江国民学校 訓導
S20. 3. 20	長野（台北）	長野県（台北州）	予歩伍 S14. 8. 31	上條庸夫 T6. 7. 14 台中州台中市明治国民学校 訓導（1942）
S20. 3. 20	岡山（台北）	岡山県（台北州）	予歩伍 S14. 8. 31	河合資郎 T7. 2. 6 台北第一師範学校附属第二 国民学校 訓導（1942）
S20. 3. 20	大分（台北）	大分県（台北州）	予歩伍 S14. 8. 31	工藤俊隆 T8. 4. 28 台南州台南市市港国民学校 訓導
S20. 4. 20	敢 1787 部隊 S20. 4. 1	読めない（台北州）	予歩伍 S6. 2. 31	小池利春 M44. 7. ?24 台北州台北市太平国民学校 訓導
S20. 3. 20	福島（台北）	福島県（台北州）	予歩伍 S10. 8. 31	佐藤正典 T4. 8. 27 台北州台北市樺山国民学校 訓導
S20. 4. 20	敢第 1786 部隊 S20. 4. 1	宮城	予歩伍 S7. 4. 1	鹿野信夫 M45. 1. 15 台北州台北市堀江国民学校 訓導
S20. 3. 20	宇都宮（台北）	栃木県（台北州）	予歩伍 S13. 8. 31	菅沼忠夫 T6. 5. 20 臺南州北港南国民学校 訓導
S20. 3. 20	大阪（台北）	大阪府（台北州）	予歩伍 S14. 8. 31	鐸木晃 T8. 10. 7 高雄州高雄市楠梓国民学校 訓導
S20. 3. 20	廣島（台北）	廣島県（台北州）	予歩少尉准 一 S6. 12. 22	田中公平 M27. 3. 21 高雄州州立高雄商業学校 囑託（1942）

S20.3.20	津（台北）	三重県（台北州）	予歩伍 S5.8.31	竹内楠次郎 M42.7.26 台北州台北市蓬萊国民学校 訓導
S20.3.20	津（台北）	三重県（台北州）	予歩伍 S11.8.31	田中榮一 T6.10.1 台南州臺南市安平国民学校 訓導
S20.3.20	青森（台北）	青森県（台北州）	二國歩二 S20.3.20	土岐兼房 M40.8.15 台南州土庫国民学校 訓導 (1941)
S20.3.20	仙台（台北）	宮城県（台北州）	二國歩二 S20.3.20	富倉隆夫 M42.6.17 台北州州立台北第一高等女 学校 教諭
<del>S20.3.20</del> S20.4.20 臨召二付留 守名簿二移 記	神戸 敢 1786 部隊 S19.4.1	兵庫県（台北州）	予歩伍 S7.8.31	内藤昌平 M45.3.18 台中州台中市明治国民学校 訓導
S20.3.20	鹿児島（台北）	鹿児島県（台北州）	予歩伍 S13.8.31	中園敏雄 T7.2.7 台北州台北市東園国民学校 訓導
S20.3.20	鹿児島（台北）	鹿児島県（台北州）	予歩伍 S9.8.31	永吉功 T3.7.5 花蓮港廳花蓮港市朝日国民 学校 訓導
S20.4.20 臨召二付留 守名簿二移 記	敢 1786 部隊 S19.5.31	廣島県（台北州）	予歩伍 S19.3.31	中村實 T9.10.9 台南州土庫国民学校 訓導
S20.6.15 現役二付 留守名簿二 移記	歩 304 S20.5.31	徳島県	現兵科甲幹 S19.8.10	仁木主税 T12.10.28 台北州淡水西国民学校 訓 導
S20.3.20	名古屋（台北）	愛知県（台北州）	予歩伍 S14.8.31	野田進 T8.1.19 台南州佳里西国民学校 訓導

公開された台湾関係『留守名簿』調査（小野 純子）

S20. 6. 1	鳥取	鳥取県（台北州）	予歩伍 S14. 8. 30	牧利春 T7. 4. 8 新竹州苑裡農業專修学校 助教諭
S20. 3. 20	鹿児島（台北）	鹿児島県（台北州）	予歩伍 S13. 8. 31	皆越市郎 T7. 9. 18 台北州台北市河合国民学校 訓導
S20. 3. 20	福井（台北）	福井県（台北州）	予歩伍 S11. 8. 31	村田吉高 T5. 3. 14 台中州鹿港第一国民学校 訓導
S20. 3. 20	静岡（台北）	静岡県（台北州）	予歩伍 S13. 8. 31	望月正五 T7. 10. 7 台中州新社国民学校 訓導
S20. 4. 20 留守名簿二 移記	敢 1786 部隊 S20. 4. 1	熊本県（台北州）	予歩伍 S8. 8. 31	森田力 M45. 3. 25 台北州台北市建成国民学校 訓導
S20. 3. 20	沖縄（台北）	沖縄県（台北州）	予歩伍 S14. 8. 31	山里義吉 T7. 7. 18 台中州頂新厝国民学校 訓導
S20. 4. 20 臨召二付 留守名簿二 移記	敢 1786 部隊 S20. 4. 1	鹿児島県（台北州）	予歩伍 S8. 8. 31	山下一郎 T2. 2. 13 台北州台北市幸国民学校 訓導
S20. 3. 20 臨召二付 留守名簿二 移記	岐阜（台北）	岐阜県（台北州）	予歩准 T15. 8. 3	安江清治 M26. 10. 1 台南州州立台南第二中学校 囑託
S20. 3. 20	福岡（台北）	福岡県（台北州）	二國歩二 S20. 3. 20	新川善秀 T6. 1. 1 台北基隆市壽公学校 教員 心得（1940）

【表 4<sup>34</sup>】

本部 (8名)

編入日	前所属/編入日	本籍 (居留地)	役職	氏名/生年月日/肩書
S20. 3. 20	沖縄	沖縄県	一國歩軍	赤嶺康哉 M26. 2. 4(康成?) 台南師範学校 教授
S20. 3. 20	東京	東京都	一補二 S20. 3. 20	親泊朝晋 M40. 3. 1 台南師範学校 教授
S20. 3. 20	佐賀	佐賀県	一國歩伍 S13. 8. 31	甲斐文二 T7. 2. 17 台南師範学校附属第一国民学校
S20. 4. 1	埼玉	埼玉県	二國伍 S13. 8. 31	金井實 T7. 3. 26 高雄州美濃国民学校 訓導
S20. 3. 20	台湾軍司令部	和歌山県	現大尉	田中文吉 M33. 9. 25 台南師範学校 配属将校
S20. 3. 20	鹿児島	鹿児島県	一國歩伍 S12. 8. 31	塚田彰夫 T6. 1. 7 台南師範学校附属第一国民学校 訓導
S20. 3. 20	福井	福井県	一國歩伍 S6. 8. 31	出口良平 M44. 2. 6 台南師範学校 生徒主事補
S20. 3. 20	福岡	福岡県	予歩少	星川三郎 M33. 12. 8 台東庁立台東庁高等女学校 教諭

台南工業専門学校

・行李隊 (1名)

S20. 4. 21		熊本県	一國伍長 S20. 4. 19	倉永友喜 T2. 5. 28 台南師範学校附属第二国民学校 訓導
------------	--	-----	-----------------	--

・末永隊 (8名)

S20. 3. 20 召集解除 S20. 5. 1	鹿児島	鹿児島県	二國二 S20. 3. 20	大津栄 M36. 2. 11 台南高等工業学校 嘱託
S20. 3. 20	鹿児島	鹿児島	一國歩兵伍長	熊谷俊水 T3. 1. 4

<sup>34</sup> 表3には66名の他、各部隊の部隊長とみられる者も含まれており、総数は69名である。前掲 台湾総督府職員録系統より作成。

公開された台湾関係『留守名簿』調査（小野 純子）

			S9. 8. 31	台南州朴子国民学校 訓導
S20. 4. 6	那覇	沖縄県	一國歩伍長 S13. 9. 1	佐々本嘉英 M36. 8. 7 台南州産業部林務内庄子駐在 森林主事
S20. 3. 20	長崎	長崎県	予歩中尉二等級 S13. 9. 30	末永大吉 M28. 3. 23 台南高等工業学校 講師
S20. 3. 20	鹿児島	鹿児島県	一國歩軍 T14. 3. 31	林栄之助 M36. 12. 3 台南高等工業学校 教授
S20. 3. 20	高松	香川県	二國二等兵 S18, 11, 1	樋元和一 M42. 3. 6 台南高等工業学校 教授
S20. 3. 20	台湾第 13803	佐賀県	一補輜兵長 S18. 10. 20	松本嘉嗣 T4. 1. 4 台南高等工業学校 助教授
S20. 3. 20	佐賀	佐賀県	二國二 S20. 3. 20	森永元一 M39. 1. 1 台南工業学校 教授

網島隊（11名）【第二中隊】

S20. 4. 1	鹿児島	鹿児島県	一國歩伍長 S20. 4. 1	住吉利巳 T8. 10. 1 臺南師範学校附属国民学校 訓導
S20. 3. 20	松江	島根県	一國歩伍長 S20. 3. 20	田部肇 M44. 1. 20 台南師範学校附属第一国民学校 訓導
S20. 3. 20		埼玉県	豫歩中尉 S20. 3. 20	網島竹治 M43. 4. 7 台南師範学校 助教授
S20. 4. 21	鹿児島	鹿児島県	一補二等兵 S20. 2. 16	原田千春 M40. 10. 15 台南師範学校 教授
S20. 3. 20	福岡	福岡県	一國歩伍長 S20. 3. 20	平島正登 T2. 3. 19 台南師範学校付属第一国民学校 訓導
S20. 4. 21	名古屋	愛知県	一補歩兵長 S20. 4. 21	本多平衛 T2. 5. 27 台南師範学校 助教授
S20. 3. 20	大分	大分県	一國歩伍長 S20. 3. 20	萬田淳 T3. 10. 28 台南師範学校付属第一国民学校 訓導

S20. 3. 20	静岡	静岡県	一國歩伍長 S20. 3. 20	望月桑太郎 T3. 2. 23 台中州彰化市旭国民学校 訓導
S20. 3. 20	鳥取	鳥取県	二國二等兵 S20. 3. 20	山本敏成 T9. 7. 7 台南師範学校附属第一国民学校 訓導
S20. 3. 20	埼玉	埼玉県	一國歩伍長 S20. 3. 20	吉沢宗吉 M43. 9. 18 台南師範学校 教授
S20. 5. 14	姫路	姫路市	一補上等兵 S20. 5. 14	吉川武 M44. 2. 11 台中師範学校 助教授

江馬隊/台南一中 (4名)

S20. 3. 20	京都	京都市 (台南市)	三丁歩少尉 S10. 12. 1	江馬道生 T7. 8. 7
S20. 3. 20	大分	沖繩県 (台南市)	一國歩伍長 S13. 5. 4	古見義夫 M38. 4. 23 台南第一中学校 嘱託
S20. 3. 20	鹿児島	鹿児島県 (新営郡)	一國歩伍長 S7. 7. 31	福島岡二良 T1. 10. 12 台南州塩水国民学校 訓導
S20. 3. 20	奈良	奈良県 (虎尾郡)	一國伍長 S8. 8. 31	保川庄一 T2. 8. 19 台南第一高等女学校 教諭

第4中隊/台南二中 (3名)

S20. 4. 1.	臺灣	鹿児島県	一國伍長 S18. 8. 31	桑原田左内 T2. 1. 7 台南市明治国民学校 訓導
S20. 3. 20	鹿児島	鹿児島県	一國伍長 S7. 8. 31	古木松春 M43. 8. 20 台南市明治国民学校
S20. 3. 20		熊本県	一國伍長 S8. 8. 31	島田重孝 T2. 8. 9 台南市港国民学校 訓導

第5中隊 (2名)

S20. 3. 20	岐阜	岐阜県	一國陸軍伍長	野々村治作 M43. 5. 8 台南市汐見国民学校 訓導
S20. 3. 20	台南	鹿児島県	一國陸軍伍長	益満武雄 M42. 3. 6 花園国民学校 訓導

野口隊（3名）

S20. 3. 20	台湾歩兵第二 中隊	秋田県（台南市）	一國歩伍 S9. 8. 31	後藤正治 T3. 1. 12 台南市港国民学校 訓導
S20. 4. 6	台湾歩兵第二 連隊 S5. 4. 1	静岡県（台南市）	一國歩伍 S5. 8. 31	鈴木平治 M42. 11. 10 台南専修商業学校 助教諭 第一青年学校 助教諭
S20. 3. 20	台湾第4部隊 S15. 4. 5	熊本県（台南市）	予歩中尉 S14. 7. 7	野口藤次郎 M31. 2. 13 台南市第一青年学校 指導員

学徒隊

・学徒隊（4名）

S20. 3. 20	臺灣第四部隊	長崎県	予備隊歩兵陸軍少 尉	栗原武吉郎 M38. 11. 6 台中商業学校
S20. 3. 20	台南	福岡県	予備役兵長 S15. 4. 1	笹尾一 T8. 9. 29 台南州州立台南農業学校
S20. 3. 20	廣島	廣島県	一國歩兵伍長 S4. 8. 31	新仏英雄 M41. 10. 15 台南市花園国民学校 訓導
S20. 3. 20	熊本	熊本県	一國歩兵伍長 S5. 8. 31	西一男 M43. 3. 31 台南市末廣国民学校 訓導

・学徒隊 大村隊（4名）

S20. 3. 20	鹿児島	鹿児島県	一國〇曹長	大村栄蔵 M35. 10. 15
S20. 3. 20	宮崎	宮崎県	二國二等兵	田畑直利 M42. 6. 2 台南州立台南農業学校 教諭
S20. 3. 20	岐阜	岐阜県	二國二等兵 S20. 3. 20	長尾和男 M35. 8. 3 台南農業学校 教諭
S20. 3. 20	水戸	茨城県	一國歩伍長	福地安 M40. 12. 9 台南市明治国民学校 訓導

・学徒隊 患輸隊（1名）

S20. 3. 20	津	三重県	一補飛上 S16. 10. 9	三井隆彌 T5. 7. 20 台南州立台南農業学校教諭
------------	---	-----	-----------------	--------------------------------

？隊（12名）

S20. 3. 20	京都	京都市（台南市）	二國	岡村善勝 M42. 9. 4 台南高等工業学校 教授
------------	----	----------	----	-------------------------------



S20. 3. 20	台南	台南州		勝田秀雄 M44. 6. 19 台南高等工業学校 嘱託
S20. 3. 20	東京	東京都 (台南市)	二等兵	田中謙一郎 M41. 4. 6 台南高等工業学校 助教授
S20. 3. 20		神奈川県 (台南市)	二等兵	田辺清吉 M37. 2. 7 台南専修工業学校 嘱託
S20. 3. 20	千葉	千葉県 (台南)	二等兵	但馬雅夫 M41. 3. 7 台南高等工業学校 教授
S20. 3. 20 ? 転属	盛岡	岩手県 (台南市)		千田栄吉 M20. 9. 18 台南高等工業学校 嘱託
S20. 3. 20 S20. 5. 25 解嘱	台南	高雄州		中里輝雄 T3. 9. 6 台南高等工業学校 講師
S20. 3. 20	広島	広島市 (台南市)	二等兵	福田実 M34. 10. 13 農事試験場総務課 雇 (1938- 台南の学校回り)
S20. 3. 20	熊本	熊本県 (台南市)	二等兵	松本正之 M35. 2. 12 台南高等工業学校 教授
S20. 3. 20 S20. 5. 25 召集解除		(台南市)	二等兵	丸山文明 M45. 4. 2 台南高等工業学校 助教授
S20. 3. 20	長崎	長崎県 (台南市)	二國	本山虎三郎 M35. 11. 7 台南高等工業学校 教授
S20. 3. 20	鳥取	鳥取県 (台南市)	二國	村上泰蔵 M38. 10. 15 台南高等工業学校 教授

福島隊 (7名)

S20. 3. 20	新潟	新潟県 (台南市)	二國二等兵	片山種吉 M35. 9. 14 台南工業学校 教諭
S20. 3. 20	千葉	千葉県 (台南市)	嘱託	鈴木徐人 M34. 8. 22 台北第二高等女学校 教諭
S20. 3. 20	近電信第一連 隊	宮城県	予通上等兵	高橋道郎 T4. 1. 25 台南工業学校 教諭
S20. 3. 20	台南	台南市	嘱託	葉山武男 M43. 2. 2

公開された台湾関係『留守名簿』調査（小野 純子）

				台南工業学校 嘱託
S20. 3. 20	横濱	神奈川県（台南市）	嘱託	松浦猛 M21. 2. 19 台南州州立台南工業学校 助手
S20. 3. 20	福井	福井県（東石郡）	二國二等兵 S20. 3. 20	前田俊夫 M38. 3. 24 台南州立台南工業学校 教諭
S20. 3. 20	山口/台湾山砲兵連隊	山口県（台南市）	一國山砲一等兵	八木岩助 T7. 3. 20 台南工業学校 助手
S20. 3. 20	台湾軍司令部 S19. 11. 11	鹿児島県（台南州）	予歩少尉	福嶋茂雄 M41. 9. 16 台中州警察部理蕃課 技手